



半田 滋 『「戦地」派遣 変わる自衛隊』

自衛隊の変貌と政治の迷走 17年に及ぶ取材で分析

水島朝穂（早稲田大学教授）

著者が旧防衛庁の担当記者となったのは、自衛隊の海外展開が始まった1992年である。おりしもPKO等協力法の制定をめぐり、国会は大きく揺れていた。以来、周辺事態法、テロ特措法、イラク特措法と、自衛隊海外派遣の法的枠組が作られていく。これに伴い、「専守防衛」を建前とする自衛隊は、その組織も装備も運用思想も大きく変わっていった。

本書は、その「変化」を「9・11」以降のなし崩し「戦地派遣」から説き起こす。そこでは、あきれるような政治の裏面も明らかにされる。

「ミサイル防衛」や米軍再編により、米軍との異様な一体関係も進んでいる。それを分析する本書の切り口は実に鋭い。他方、「戦地」における「人道復興支援」の実態やイラク空輸を描くとき、政治の迷走に対する怒りとともに、現場で任務に就く一般隊員（その向こうにいる家族）への眼差しを忘れない。

違憲の存在として自衛隊を外在的に批判することはやさしい。だが、自衛隊の深部と芯部で起きている変化をつかみ、それを市民に知らせていくことは極めて重要である。

著者は、記者として、取材対象との緊張関係を維持しつつも、関係者との信頼関係を築きながら、表に出にくい部内の声を着実に拾い、自衛隊内部に生ずるどんな兆候も見逃さない。

本書のどこを開いても、その行間に、17年におよぶ地道な取材の経験と蓄積が感じられる。これが、リアリティと説得力において他の追随を許さない本書のすぐれた特質と言えるだろう。本書を推薦する所以である。

■ 岩波新書 780円